

Title	或る書友への手紙：書評を兼ねて
Author(s)	深瀬, 基寛
Citation	英文学評論 (1955), 2: 169-171
Issue Date	1955-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_2_169">https://doi.org/10.14989/RevEL_2_169</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 或る書友への手紙

——書評を兼ねて

### 深瀬基寛

先日小生ホロ酔い加減でへんな手紙をお届けした記憶がありますが、さて何を書いたかこのごろ特に小生の傾向として酔醒の間が記憶で繋がらず、責任回避上、実に便利なことになつたものだとわれながら驚いています。はたの迷惑はもとよりお察しします。

ボーラの『シンポリズムの遺産』のことを申し上げたかと思ひますが、その後よく考へてみると、あの本は実にいい本に違ひないのですが、内容が英仏独露に跨つている上に、引用詩句が非常に多く、読むには詩人の全貌を知るにたいへん重宝ですが、反訳となると、楽しみよりも庄迫感が先に来て、うっかり手をつけると命取りになりそうで一寸躊躇されます。スペインダーの『創造的要素』の方はその点気楽で、『歷程』がのせるな

ら、巻頭の「夢を孕む単独者」に続いて少くとも三四篇はのせてみたいと思つています。いま、オーウエルとエリオットを対象とした絶望論のところをやつています。近來こんな楽しい仕事は珍らしいことです。

それとは別に学校へ届いた本のなかに、Allen Tate というアメリカの文芸批評家の *On the Limits of Poetry* という本あり、高いアメリカ本なので学校へ買わして先日から読み始めましたが、これにはすつかり降参してしまいました。名前なら前から聞いており、何かよんで記憶もあります。こんどの本は約二十年間の批評的収獲から粹を抜いて三百七十頁くらいの本にしたものですが、こんな奴がアメリカにいると思つとこちらに命が三つあつてもまだ足らんという気がします。結局はこの論文も詩の本質の問題へ帰入していますが、その書き振りと、いうやつが尋常でなく、極く気軽なエッセイ体ながら、これほど手つびどく急処をやりおつた奴を知りません。実は先日夜中に眼が覚めて、眠り薬のつもりで手を伸べたのが悪く、朝までやめるわけにゆかず、そのついでに二三日ぶつ続けによみ、いまこれを書いているところです。「詩の三つのタイプ」という論文の最後の一行が「この問題については議論はこれくらいで打ち切りにしましょう。ここらあたりで眼のある人は見ればいい

のです」とあり、これには降参しました。小説論はドストエフスキの「白痴」の最後の場面からとつた「宙にぼぶ一匹の蝨」という題をつけ、これまた天下一品の小説論と思ひました。中村光夫氏を説服するにはこれに限ると思ひます(秘中の秘！)。

論文は全部で三十篇くらい収つていますが、何も全部やる必要はなく、そのうち四五篇を訳して、文芸批評の極上等の見本として押し出せばいいと思つています。アメリカ文学の翻訳はまだなかなか下火になりそうにもないと思ひますが、みなベスト・セラーをねらう奴ばかりでこんな良質の批評に誰も注目する者がありません。「伝統的の社会とは何か？」という講演の原稿はヴァジニア大学で朗読したもので、日本人には不要なところもあるのですが、そのエッセンスに至つては七面倒なエリオットの伝統論よりも遙かに滋味があり、つまり伝統の欠如態、いわば伝統のネガ版を小説字以上にうまく描いて、うならせられました。日本の批評文字はどうも一寸した思ひつきを真正面からむきになつて主張するに急で、そのくせ閑節が気の毒なほど弱く、説得力が逆比例するのですが、このネガ版式の方法からわれわれは大いに学ぶべきだと思ひます。形態面からいつても、文芸批評がとるべき形について最上級の見本を提出していると信じます。ロマン主義のマスクをいつまでも抜き切れない現代批評

と、他面、リチャーズなどの科学のマスクを武器として登場して来た新流行の批評に対して、これ以上の批評の批評というのは容易に見つからないと思ひます。またウエイドレよりも遙かに即物的で、直観的だと思ひます。ペイターとはまた違つた意味で批評がそのまま最高級の文学になつていきます。

こんなことを書いてゆけば切りがありませんが、ともかくこれは小生だけの自己陶醉でなく、書物のカバーにかいてある文句によると、アメリカでもこの二十年間の文芸批評界の一大形威力だということですから。

拙著は素人には割に好評、詩人の一部には譽評と思ひますが、英文学界は読者をもたぬ仲間ばかりの寄り合い世帯ですから、いろいろと暇にまかせて勝手な註文が飛び出すことと思ひます。「続エリオット」はなかなか書けそうにもなく、それについて、も一つ思ひ出したのですが、Four Quartetsの解釈で非常に面白い本が匿名で、詩人の Roy Campbell の推辞をつけて出しました。64頁の本ですが、これも解説というよりも解説そのものが独立した立派な文章で、存在の四次元という新しい数学の立場から実に細かく説いてあります。そういつても詩を数学に還元しようというような馬鹿氣たものでは勿論ありません。他日、これもやつてみたく、これを以て「続エリオット」

に代えようかというずるい考えも起しています。

オーデンも来春出ると思いますが、これは見本程度のもので、オーデンがら手紙が来て、そのうち一篇だけを抜いてくれ、自分の嫌いな詩だから、詩集から省いたのだ。これを入れられてはたまらん、といかにも詩人らしい返事でした。その代り、最新の詩集を二つ示してそのうちからも取つては如何と教えてくれましたが、こんな詩集はまだ学校へも来ていません。省いてくれというのは、アンソロジーにも入つていて可なり知られたもので、それが詩集に省かれてゐることは知つていましたが、有名という点で入れてみたのが失敗でした。どうも雑念が入ると、何ごとともかくやり損うもの——やはり昔の坊主は偉いものだと下性の知恵を今頃廻しています。

そういえばあなたの中世研究の脱稿の日を待望しています。そういえば、右のテートの本もまさに「詩とデカダンス」そのものです。この男の科学的ポジチヴィズムに対する徹底的な反撃そのものが逆に詩の意味を最も鋭角的に彫り上げています。「詩と科学」「詩と社会」……このとの一文字で *co-ordination* になり下つたところに「詩のデカダンス」があるということです。逆にいえばこれこそ現代に無類の「詩の弁護」——むしろシェレーの場合のこの「弁護」の防衛的な意味を打ち破つて攻勢に

転じてるのですが、ピーコックの代りにリチャーズを置き、シエレーの代りにテートを置けば、この本の本質が一挙に明瞭になると思いますが。但しシエレーの詩そのものに対してはエリオット同様に、シエレーが気の毒になるほど喰ひ下つています。

キイツ論はキイツの絶讃です。さてその攻勢も「主張」に硬化せずに、ユモアーそのものの形で提出されているところが味増も味増、上味増だと思えます。例えば、マリイの『キイツとシエイクスピア』については脚註でたいへん直観的な良書だと讃めておきながら、結局マリイの本は全体が何を言つてるやらさつぱり解らぬ、だから脚註で讀めておくといはんばかりの書振りなんです。ロマン主義∥詩のデカダンスと、科学的ポジチヴィズム∥詩の放棄∥社会的意志の単なる自己主張∥詩以前……この近代文学のガンをこんなに見事にえぐり取つてくれるのですから、これでは小生など命が三つあつても足りません。現代において詩とは結局なんであるか——さすがのリチャーズも、まして目下流行の文学の実証的研究家の有象無象も、このテイトの慧眼にはカブトを脱がないわけにはゆくまいと思えます。朝からお酒という訳にもゆかず、こんな妙な独酌になつてしまつたことをお許し下さい。(十二月十九日朝)